

昭和66年2月1日 第3種郵便物認可  
平成21年8月1日発行(毎月一回)日発行  
俳句雑誌 沖 第40巻第8号



俳句雑誌[おき]

8  
月号

沖  
発行所

# 能筆

能村 研三

## 米沢を訪ねて

先月、「沖」の東北大会で山形県の米沢を訪ねた。いつもは山形の会員が多い谷地周辺の天童や寒河江などで開かれることが多かったが、今回は私の希望もあつて置賜の米沢で開催をした。

今回の米沢行は翌日の同人句会があるため早朝に帰らなければならぬので、大会の前の午前中に米沢のまちを見ることにした。

米沢にお住まいの佐々木昭・泰子さんご夫妻が駅に迎えに来てくれて、早速案内をしていただいた。

米沢のまちは現在NHKの大河ドラマ「天地人」の兼続ブームで大変賑わっていた。

市内の上杉博物館では「天地人博」なるものをやっていて、テレビ人気に誘われた若い世代の来場者が多かった。

米沢には、井上ひささんの故郷である川西町の「渾筆堂文庫」を訪ねた時に来たことがある。この時、上杉神社の「雪灯籠祭」を見ることが出来たが、今回はじめてじっくり見ることが出来た。

直江兼続は、上杉景勝を支えた文

能筆の形代なれば流れよき

米沢四句

石積み の 直江堤 や 夏蕨

山裾に雲湧くちから山法師

梅雨めきて家並み約まるうこぎ垣

耳打ちの聞えてをりぬ半夏生

続飯もて封する文や土用中

温血の人と握手す半夏雨

夏菜莢や呼び捨ての名はなつかしき

訪るを待てぬ転機や西日受く

甚平着て詰めの甘きを指図せる

武兼備の智将で、深い教養と見識は秀吉にも高く評価され、家康が最も恐れた男と言われた。その後上杉家の米沢移封に伴い、城下を整備、現在の城下町米沢の基盤を築いたと言われている。

今回は「直江石堤」を見たが、兼統は米沢のまちづくりとともに、水害を防止するため、蛇堤を築いた。

それは大小の河原石を横にならべて積み上げる「野面積」と呼ばれる戦国時代の石垣造りの工法である。

米沢市中心地に戻る途中、昔ながらの家並みがあった。兼統に従って来た下級武士が住んでいた地区で、古い建物と共に各家には「うごぎ垣」があった。うごぎは、ウコギ科の植物で、米沢地方では古くから食用を兼ねた垣根として利用された。

米沢は兼統の行なったまちづくりとその後藩主となった上杉鷹山の藩政改革は、現代の人たちにも大きな影響を与えている。

能村 研三



# 蒼茫集



木の芽風

渡辺

昭

少年期

辻直美

岩滴る索道の荷のゆきもどり  
笹舟のほどけて梅雨の蹠蹠に  
沖雲にはしる火櫛梅雨はじめ  
つつ抜けに少年の声木の芽風  
接心の僧の合掌みどり差す  
水飯や力抜くときもの見えて

死者悼者

北川英子

かの日より幾度目の朴咲くや不壊  
死者悼者もほんの時間差夕焼くる  
花失せて桐・椽なべて森となる  
誰が投げし夕焼の海の花束よ  
窯変の割るも残すも緑さす  
遡りゆくごとと滝の落ちにけり

竹皮を脱ぎ確実に少年期  
蟻の列人海戦といふがあり  
文弱のをのこなれども冷し酒  
晴耕の雨読ばかりや麦は穂に  
かなぶんの仮死に付合ふのも余生  
誰か来てをりサングラス置かれある

夏空へ

遠藤真砂明

胸くらたげんさんにつんと南風の訃報かな  
海五月いつも誰かが手を振つて  
見張鵜に水平線が眠くなる  
サーファアのあはや構へを立て直す  
初枇杷をすするや種をぼつと吹き  
夏空へ放ちて若き舫綱

登四郎忌

松本圭司

師羽化より朴は男の花となる  
過ぎし日のごとく色褪せ水中花  
緑蔭に気炎をあげるアスリート  
かつを食べ脳細胞の活性化  
大夕焼地球のすこし焦げ臭し  
人の死に人の集まる夜の新樹

新涼

広渡敬雄

遠花火雲の白さに気付きたる

八月十五日  
八月十五日

九段下 駅 3 b 出口 油照

水に映る松の枝より蟬の声  
新涼や和綴ぢの錐を打つ音も  
無花果食ふすこし眼鏡のずれた人  
登高やかなかなか合はぬ周波数

くづれぬほど

柴崎英子

噴水の頂点ふつと無重力  
異次元をすこし出入り昼寝覚

棒先に硝子玉吹く梅雨夕焼  
白薔薇の香りくづれぬほどに風  
命名の墨の香薔薇の咲き満ちて  
眠る嬰かすかに笑みて聖五月

風の接点

佐山文子

藻を刈るや川面はひかり撥ねかへす  
威を保つことの疲れや花菖蒲  
海山の風の接点新樹光  
青蘆原水面になにか動くもの  
駅中で済ます買物夕薄暑  
恙なきいまが晩年水中花

真夜帰り

久染康子

をんな身に合はぬうねりや籐寝椅子  
打水に添うて旗亭に吸はれけり  
真夜帰り金魚が起きてゐてくれし  
父の日の母の都合で繰上がる  
南風湿りして教会の鉄扉  
旅果てや白夜の国に寝惜しみて

激水 辻美奈子

落ちながら滝のひとつづつ孤独  
何を呑みしかくちなはの身のいびつ  
激水にありありと白半夏生  
山藤や水は水音生みてやまず  
このあたり化石出づてふ岩清水  
たましひのやはらかく爆ぜ合歡の花

清張の謎 樋口英子

桐咲けりおのれ律する高さにて  
薔薇剪つて清張の謎ふつと解け  
青梅の堅さ素朴に子は育つ  
アルバイトらしき長身袋掛  
離陸して旅へたかふる夏帽子  
めいつばい昭和を生きて豆ごはん

白潮忌 成宮紀代子

抱きしめて浮輪の空気抜いてをり  
百選の松に涼しき人語かな  
芝桜起伏の形の風の色  
涼風やチヨゴリの丸き立膝に

父の字の「鈴虫十時」とある日記  
来歴の川を遠見に白潮忌

裏事情 安居正浩

曝しけり太宰治も青春も  
伝へたきことのおふれて天の川  
万緑に明るさといふ暗さあり  
桜桃のつながつてある裏事情  
麦秋や手習ひといふ習ひ方  
夏山に何するでなく石を積む

雲の峰 松井のぶ

若き師の皓齒見上ぐる雲の峰  
俳縁といふありがたさみどりの夜  
言霊とも沼の霊とも虹二重  
蛩とぶふうはりふはと八十年  
樹にのぼる孤独の蟻のうろorus  
長老の足・腰もどり祭くる

途切れなし 千田百里

嶺々をつなぐ銜や電波の日  
ダリアぼんぼん咲いて女流に途切れなし

荒神輿過ぎてシャッター通りかな  
粽束提げて五条の橋渡る  
青蔦に業平竹の捕縛さる  
義に篤たくけんぜんき男攫ひしはたた神

芒種 吉田政江

青蘆やもう親の目のとどかざり  
水ボトル大より売れて芒種かな  
二番茶の刈られしあとの霧深し  
嫁ぎゆく娘と青茅の輪くぐりけり  
噴水の背伸びしてをり金の鯨  
さくらんぼ摘み少年の眼となりぬ

聖域 秋葉雅治

滝行に滝蒼ざめて落ちぬたる  
峻峰は雲の聖域梅雨きざす  
守旧派とよばれて久し水中花  
休肝日と決めて父の日やり過ごす  
あめんぼに表面浮力といふがあり  
先代の晩年を知る竹夫人

十指 松井志津子

針穴に糸の三度目薄暑かな

爪切つて十指涼しく街へ出る  
本懐の色はどの色七変化  
罨といふしづけきものよ蟻地獄  
渾身の紅南限の玫瑰に  
団扇さぼてん蜂起の蕾まくれなみ

系譜 鈴木良戈

淀みなく伸びし系譜や鯉幟  
哀しくて優し阿修羅や遠き雷  
母の日や妻のピアノの良きタツチ  
翡翠の逆さ落しや水輪幾重  
紫陽花や水の香りの風たてり  
回診や白衣の下の更衣

襲の色 大畑善昭

雀色時たけのこの出始めて  
筍の斑ふちの襲の色ぞよき  
綱引きの汗の膺揃ふなり  
われもまた浦島太郎浦島草  
葎切や川は山中出てなごみ  
雑巾をかたく絞りて今日は夏至

# 潮鳴集



待つころ

高橋 ちよ

竹皮を脱ぐたび青き空めざす  
待つころ僅かにありて今日ついで  
裏山の裾ひるがへす青嵐  
百歳のちちと湯浴みす父の日よ  
風出でて浮葉にささら波たてり

父の日

古屋 元

コックピットめきたる父の日の書齋  
円周の中の円周夏つばめ  
もつと濃く画き切つてこそ青岬  
江の島は彼方手のひらにかたつむり  
一艇の乗る夏潮の力こぶ

湧き止まぬ

細川 洋子

湧き止まぬ峰雲全盲ピアニスト  
とんとんと宙を揃へて止む噴水  
薫風とバランスをとる一輪車  
梳る髪と歳月星涼し  
白といふ魂魄の色朴花忌

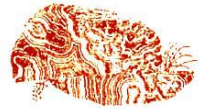
金魚の傍

甲州 千草

青葉酔ひなるモノレールの止まりやう  
喪服解き金魚の傍に少し居り  
時の日のねぢれば音を発す紙  
桂剥きに緑雨の音の透けてをり  
日銀へ貨幣館へと梅雨の鳩



# 沖作品



# 能村研三選

聖五月愛聴盤にノイズ有り

東京

鳥居 秀雄

琵琶の音も共にさみどり登四郎忌

人嫌ひ程よき距離のサンガラス

フェーズ5に地球は回る蝸牛

天守には五月の鷹の爪の跡

父の日や魅を煮てちちの齡越す

草波に浮くをおぼえて蜥蜴の子

蚕豆をむくもうひとり子の欲しき

一八やひるをともせる鍛冶の土間

稽古着の紺の立札茅の輪かな

演能の笛方若し春の宵

朝凧に碧空うつし五月来る

藤房の盛る色ゆれ御簾のごと

墓碑に手を夢二偲べば春愁

蹲踞の雫の光る木の芽風

追悼したけん氏

神奈川

井原 美鳥

愛知

上田 玲子

袋角瞳のきれひな鹿と遇ふ

千葉

望月木綿子

瓦斯灯は明治のあかり籐寝椅子

中世の鉄扉に天使蔦茂る

梅花藻の下を魚影のひた走る

形代や修羅場を抜けし水の音

九条の国薫風を深く吸ふ

見えてゐてまだ遠き海白日傘

息合はせ漕ぐタンDEMや若葉風

窪みたる砥石の月日沖縄忌

撫で肩の白きアオザイ青嵐

船霊に柏手を打つ海霧霽るる

淋代の海よりやませ馳せて来る

山刀伐峠逆立つてゐる雷雨

夕焼けて絶佳・絶佳と鼠ヶ関

朝な朝な亡国のごと烏賊火消ゆ

小河滋嗣に

愛媛

鈴木 伸一

東京

藤原はる美

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

草波に浮くをおぼえて蜥蜴の子

井原 美鳥

炎天下、熱した石の上などで、青光りする鋼鉄のような背をして獲物を狙っている蜥蜴は何か不気味な存在である。しかしこの句は、子供の蜥蜴であるので不気味さの中にも何か愛らしいところもある。よく見ると非常に澄んだ瞳を持っていて、その動きは臆病かつ敏捷である。すべるように草間に姿を隠す瞬間を作者は捉えた。草の波に浮くようにすがりついている蜥蜴の子に何か愛らしいものを感じた。

藤房の盛る色ゆれ御簾のごと

上田 玲子

藤房がたわなに垂れているすがたは、優美でどこか雅の世界へと引き寄せてくれる。御簾とは、緑色の布の縁取りなどを使った簾のことで、大名や公家などが部屋の中や外を分けるのに使った。その歴史は長く、小倉百人一首の中にも「御簾」が描かれている。「御簾」は平安時代より宮廷の調度品として欠かさないものであった。すだれのように垂れた藤房が雅の風に揺れているのは正に王朝絵巻の一シーンを見ているようである。

形代や修羅場を抜けし水の音

望月木綿子

形代は紙で人体の形をしたものをつくり、これを流して災を除いた。川の流れはいつもスムーズではなく、難所や障害物などもあり、いわゆる修羅場を潜り抜けなければならぬ。人生もこの形代そのもので、今までにいくつもの修羅場を潜り抜けてきた。形代が修羅場を抜けた水の音は、作者にとっては今まで生き抜いてきた自信の音でもあった。(以下略)

聖五月愛聴盤にノイズ有り

鳥居 秀雄

レコードはCDにとって代わり、近年はウォークマンから携帯でも音楽が聴ける時代になった。音楽が広く普及したことは大いに歓迎すべきことなのだが、昔のようにじっくり座つてステレオで音楽を聴くのではなく、電車の中や歩きながら聴くいわゆる「ながら聴き」の時代である。レコードは針を落とすことから音が出るまでのしばらくは「シャリシャリ」という音から音が出るまでのしづらくなつてしまつた。大事にしていた愛聴盤、時を経るにつれてノイズも出るようになってしまつたが、CDで聴くよりずっと深みがあるのである。「愛聴」の意味は人それぞれ違うもので、聴く年代や音楽のジャンルによつても違ってくる。新緑の美しい「聖五月」、愛聴盤により音楽の森を散策するのは至福の時なのかも知れない。